

学習院大学 国際社会科学部

訪問調査対象 プログラム名	ベトナム FPT 大学インターンシップ・プログラム
類 型	語学研修型・キャリア開発型×選択必修型

A. 海外プログラムの詳細

【要旨】

- 国際社会科学部では 4 週間以上の海外プログラム参加が卒業要件となっており、本プログラムは大学が提供する卒業要件プログラムの 1 つである。
- ベトナム最大の IT 企業が運営する FPT 大学ダナン校が受け入れ、1 週間の語学研修の後、4 週間ダナンの企業においてインターンシップが行われる。
- 1 年前期には「海外研修Ⅰ」が、帰国後には「海外研修Ⅱ」があらゆる海外研修において必修となっており、充実した事前・事後学習が行われている。

1. 教育活動、教育支援、アセスメントと対応した教育目標設定

全学、学部あるいは学科での DP あるいは教育目標との対応関係が明確である

同学部は、国際的なビジネスで活躍できる人材、国際開発に貢献できる人材育成を目標としており、そのために目白の大学キャンパスを出て、海外で学ぶことを必須としている。具体的には、卒業までの 4 年間に 4 週間以上の期間で、一定の条件を満たす海外プログラムへの参加が卒業要件とされている。学部が提供する海外プログラムに参加することで卒業要件は満たされるが、学生が自ら探してきたプログラムであっても審査によって認められれば卒業要件となる仕組みを構築している。

本プログラムは卒業要件を満たす、学部が提供するプログラムの 1 つである。本プログラムはインターンシップを通じて、英語が母国語でないベトナムで、日本とは違う価値観に触れるとともに、英語を母国語としない人や英語が話せない人と萎縮せずにコミュニケーションできる能力の育成を目指している。また、本プログラムは参加年次の指定はないが、1 年生の参加が多いため、帰国後その経験を活かして卒業までに何をどう学ぶかのビジョンづくりに役立ててもらうことも意図されている。本プログラムの目的、達成目標は以下の通りである。

〔目的〕

第一に、本学国際社会科学部の理念である「国際的なビジネスの場で活躍できる人材の育成」を目的としている。

第二に、海外留学を必須としている本学部の学生が留学を経験することで、他学部の学生にも留学の重要性を波及させ、本学全体の国際化推進に資することを目的とする。

〔達成目標〕

本プログラム全体を通して、早期の年次から就業体験をした学生自身が、働くことの意義や将来のキャリアを意識し、2年次以降の英語で学ぶ専門科目の学習計画の立案や長期留学への動機づけ、卒業の進路を検討することを達成目標とする。

そのために、参加学生に対しては、自発的に英語を運用し、就労体験を通じて日本との違いを肌で感じ、グローバル社会で働くために必要な積極性と順応性を身につけることを達成目標とする。

2. 海外プログラムの実施状況とその内容

専門にかかわる主目的のプログラムに加え、現地の学生や人々とのコミュニケーションにかかわるプログラムが明示されている

【実施時期】 8月～9月

【実施期間】 36日間

【実施場所】 ベトナム・FPT 大学ダナン校およびダナン市内インターンシップ受け入れ企業

【参加学生数】 5～11名程度

【プログラムの具体的活動内容】

FPT はベトナム最大の IT 企業であり、エンジニア養成のためにハノイに FPT 大学を設立している。その別キャンパスが、FPT が建設したダナンのスマートシティ内にある FPT 大学ダナン校であり、本プログラムは、FPT 大学ダナン校が本大学のために開発したものである。

全参加学生は派遣中の 5 週間をダナン校の寮で暮らす。2 人部屋だが、学習院大学の学生は必ずルームメイトが日本人以外の留学生になるようにダナン校によって配慮されている。

渡航第 1 週初日にはウェルカムパーティが持たれ、参加学生のバディとなってくれる FPT 大学の学生との交流が行われる。続く 2 日目はダナン見学。その後 3 日目からの 4 日間は午前中の 3 時間を使ってインターンシップに必要な英語を学ぶ。午後は毎日、職場でのコミュニケーションや仕事のスキル、キャリアパスの準備などのワークショップが行われる。ベトナム語会話も挨拶ができる程度に学ぶ。渡航第 1 週の終わりには、寮で **First week internship sharing** を開き、各自の経験を報告しあって共有するイベントも行われている。それ以降の日曜日には観光地へのツアーなども組まれているが、インターンシップそのものが大変なので参加は任意となっている。渡航第 2 週の初日にインターンシップ先のオリエンテーションがあり、派遣先のトレーナーの指導のもとインターンシップを開始する。通勤は寮から毎日マイクロバスによる送迎がある。昼食はインターンシップ先で、朝夕は各自で寮で自炊することになっている。

学生は期間中、インターンシップ以外に 2 つの課題に取り組む。1 つは、インターンシップでの活動報告を週報として英語で記述し、FPT 大学のコーディネーターに提出することである。2 つめは、インターンシップ終了後、FPT 大学ダナン校でクロージングプログラム

が開催され、そこで自分の学んだことや成長したと思うことをプレゼンテーションすることである。ここでは、アジアを中心とした他国から来ている留学生も参加するため、英語で発表しなければならない。

3. 事前・事後学習およびカリキュラム全体との関連

全学・学部・学科のカリキュラムと連携している（事前・事後両方に関連科目がある）

現地での学修に関連する事前学習のコンテンツが潤沢に用意されている

現地での学修に関連する事後学習のコンテンツが潤沢に用意されている

当学部では、4週間以上の海外プログラム参加が卒業要件であるため、その準備のための「海外研修Ⅰ」が1年次前期に、そして初めての卒業要件に該当する海外プログラム参加後の Semester に「海外研修Ⅱ」の科目が置かれ、それぞれ必修となっている（「初めての」である理由は複数回参加する学生もいるため）。

この「海外研修Ⅰ」は全ての海外研修の事前学習と位置付けられている。1年生が入学後にどの海外研修に行くかを自分で決める必要があり、その考え方を学ぶ内容である。

海外研修を経験した先輩などの話を聞くことに加え、どんな目的と内容の海外研修があるのか、協定留学の場合にはどのような履修要件があるのか、費用はどれくらいかかるのか、自己手配の海外研修では卒業要件を満たすための条件は何かなどを学ぶ。特に卒業要件との関連では、履修要覧を持参させ、入念に指導している。また、海外研修の費用を親が負担することが多いと思われる中で、学生が親へしっかりと整理して自分の希望を伝え、了承を得ることもつながっていると考えられる。

授業の最後には、実際に行くことを想定し、必要なことを細かく調べて「ドリーム海外研修プラン」を作成し提出する（そのプランで実際に行くかどうかは問われない）。

また、本プログラムのための事前学習としては、申し込むと同時にどんな職種のインターンシップをしたいか希望を出し、FPT 大学の担当者とオンラインで面接しながらマッチングを探る。インターンシップ先は FPT 大学側が希望と面接に基づいて用意してくれる（ホテルのレストランやフロント、教育機関のマーケティング部門やソフトウェア会社のアシスタントなど）。

事後学習としての「海外研修Ⅱ」は、まず渡航前にオリエンテーションがあり、学生は海外研修中に「多様性」に関する質的データ（写真や気づいたことの観察データなど）を収集してくるよう指示される。そして、帰国後の英語で行われる授業では、様々な海外研修の経験をシェアしモチベーションの維持と向上、キャリア開発、そして世界の多様性を考えることがテーマとなっている。具体的には以下のとおりである。

- ① 振り返りペーパーの記入
- ② 英語を含む外国語能力の向上についての自己評価。向上したかしなかったか、足りないことは何か、それを帰国後の学修でどう伸ばすかをグループワークで考える。

- ③ 世界の多様性について、持ち帰ったデータを基に英語で各自スピーチを行う。ここではスライドを使わず、写真はプリントして見せる。スライドに依拠せずスピーチでのコミュニケーション力を重視している。
- ④ 海外経験を持ち、様々な職種でキャリアを築いている4人のゲストスピーカーの講演やワークショップを通して自分の将来と海外体験を結びつける。
- ⑤ 自己分析と自己PRスピーチ。自分の強みと弱み、海外研修から何を学んだかをキャリアにつなげて考え、そのために大学で何を準備するかを2分間にまとめてスピーチする。重要なことを取捨選択してアピールするため、就活にも活用されることを学部としては意識している。

同学部では93の国・地域に学生を送り出しており（2018年度実績）、「海外研修Ⅱ」でその経験を共有することは大きな意義を持つと考えている。

4. 効果測定・アセスメント、カリキュラムマネジメント

全学・学部あるいは学科でのDPや教育目標、あるいは海外プログラム個別の教育目標に

対応させた形で、海外プログラムの成果を評価する何らかの仕組みがある

プログラム設計が複数の教職員で共有され、かつその実施後に現地での活動状況や学習成

果を鑑みてプログラムに修正を施し、次年度に引き継いで行ける体制が確立されている

学生の満足度は高い。2019年度に参加した学生へのアンケートの満足度（5段階評価）は、本プログラムは平均4.3程度である。

また、「海外研修Ⅱ」で課すレポートを見ると、本プログラム参加者は気づきが多いことが見て取れ、現地での学修と経験が深い学びに繋がっていると本大学では評価している。

本プログラムに参加した学生は、インターンシップで知り合った他国の学生やインターンシップ先の従業員と帰国後も連絡を取り合っているケースが多く、他の海外研修よりも海外の人々との豊かなネットワークを築いているように見える。

プログラム改善では、帰国アンケートでのプログラム評価の結果を重視しているほか、毎年秋にFPT大学の担当教職員がその年度の本プログラムの実施報告書を携えて来日し、状況のフィードバックがあるため、これもプログラム改善の有用な情報としている。

5. 本プログラムに参加しやすくするためのサポートや工夫

JASSO奨学金（7万円）以外に、学部独自の援助金制度を整備しており、家計支援型援助金（15万円）と学業成績優秀型援助金（5万円）があり、条件がそろえば併給できる。

本プログラムは卒業要件ではあるが、単位認定はされない。ただし要件を満たしたかどうかを審査の上、修了書が必要となっている。

6. 本プログラム参加者の他の海外プログラムへの参加

事後学習「海外研修Ⅱ」では、中長期留学に行った学生の話聞く機会、学生同士で様々な形や場所における留学について語り合うことを通してお互いに啓発させる回などを設けている。

また、学生には海外研修の説明会の動画を、オンラインでいつでも視聴できるようにしていることに加え、学生に海外プログラムへの参加を呼び掛けるために、海外大学についての説明会が年に10回程度開催されている。その中には海外大学から教職員を招聘して、現地の情報を伝えるものも多い。また留学相談室の設置により、学生は何回でも海外研修についての相談をすることができ、意欲を実現に結び付けられるよう支援している。

卒業までに複数回、海外研修に参加する学生も多い。特に本プログラムは、半年以上の中長期研修の参加につながるケースが多い。2018年度までに本プログラムに参加した35人のうち、7人が2019年度までに中長期の海外研修に出発している（オーストラリア、アメリカ、ドイツ、台湾など）。

B. 学生インタビュー

1. 学習院大学学生1（国際社会科学部国際社会科学科3年）

（1）入学前の海外・異文化体験、海外プログラム参加に対する気持ち

自分は親の教育方針で中高生時代は多くの海外プログラムあるいは留学を経験している。中学2年生の時にはイギリスの語学学校で2週間英語を学んだが、渡航当初は英語を聴き取ることも話すこともままならず苦労した。しかし偶然怪我をした時にどう怪我をしたのか、どんな症状なのかということを経験とボディランゲージで必死に伝えたら理解してもらえたので、そこから少しずつ自信がついていった。中学3年生の時には、ニュージーランドの現地の中学校で授業を受ける海外プログラムに参加した。このプログラムには何人かの日本人中学生と参加していて、既にイギリスでの経験がある自分は、何度も代表でスピーチや発表を任された。

高校時代は英語の語学力を高める経験が特に豊富であった。高校2年生の時には地元の市が主催する海外プログラムでアメリカのウィスコンシン州の家庭に2週間ホームステイをした。また高校生の頃、自分の家庭にアメリカの高校生のホームステイを6週間受け入れ、その時のコミュニケーションも英語力の向上に繋がった。そして高校3年生では1年間アメリカの高校に留学した。ホームステイ先の家庭の方針で現地の高校での単位をいくつか取得するほど、しっかり授業で学んだ。おかげで普通の高校生に比べるとかなり高いレベルの英語力を身につけることができた。

こうした中高生時代の経験から、大学入学時点では海外プログラムに参加したり留学したりすることは考えていなかった。しかし入学後、何らかの海外プログラムに参加すること

が卒業要件であることを知り、どうせ行くのであれば、ボランティアやインターンシップで、欧米圏ではない国々に行ってみたいと考えた。

そして費用の安さ、参加した先輩から聞いたプログラムの内容、加えて夏期休暇に渡航するので通常の授業履修に影響はないことなどの理由から、「ベトナム FPT 大学インターンシップ・プログラム」に参加することを決めた。

(2) 参加した海外プログラム

2年次の夏期休暇を利用して、異文化体験を主目的として1ヵ月のプログラム「ベトナム FPT 大学インターンシップ・プログラム」に参加した。

自分のインターンシップ先はリゾートホテルで、主にフロント業務を担当した。就業時間は7時から15時までで、毎朝6時にバスが来てインターンシップ先まで送ってもらった。業務内容は、ホテルのフロントで客の荷物を預かって部屋などの所定の場所まで運んだり、客を部屋に案内したりしていた。客には韓国人が多かったが英語の案内は十分に通じた。

宿泊先の寮は2人部屋で、自分のルームメイトはブルネイ人の留学生であった。おとなしいルームメイトではあったが、部屋にいるときには英語で現在学んでいることなどを会話した。晩御飯は自炊が基本であった。自炊をしていた時によく居合わせ、挨拶もしていたことから、寮母さんとよく会話をするようになった。寮母さんに料理に使う調味料について教えてもらったり、寮母さんの孫と遊んだりした。

現地で開催された異文化交流会では、FPT 大学が主催する海外プログラムの日本人代表として日本ブースの統括を任された。日本ブースでは、肉じゃがを作ったり、浴衣を紹介したり、みんなでよさこいなどのダンスを披露したりした。自分は日本ブースを統括する者として、メンバーの役割分担を率先して取り仕切ったりした。日本ブースには、現地の人々だけでなく、中国やブルネイなどの人々もたくさん来て賑わった。

(3) 事前・事後学習について

事前学習として、ベトナムの社会や習慣、物価、通貨のレートなどの基礎知識を教えてもらい、それが渡航後にとっても役立った。事後学習は、「海外研修Ⅱ」の授業として行った。

本プログラムとカリキュラムとの繋がりについては、科目で学修する異文化理解などの知識を、現地に行くことで、日本との文化の違いを実感することができたので、繋がっていると感じた。

(4) 成長を感じる点

本プログラムでは異文化対応力とリーダーシップが向上したと感じている。

異文化対応力が向上したと感じた経験については、挨拶から始まった寮母さんとのコミュニケーションが快適な寮生活に繋がったことや、寮のルームメイトのブルネイの留学生とはムスリムであるということへの配慮をしつつも会話を続けていたら、宗教のこともオ

オープンに話してくれるようになったことが挙げられる。リーダーシップが身についてきたと感じた経験については、寮生活での異文化交流会で、日本ブースがうまくいくよう、役割分担を取り仕切ったり、自分が担当した肉じゃがの準備を率先して進めることが出来たりしたことが挙げられる。

(5) 満足・不満足な点

満足している点は、参加費用の負担が少なかったこと、他国から来た留学生と交流ができたことが挙げられる。ブルネイの留学生と部屋が一緒になって様々な会話を楽しめたり、インターンシップ先の現地の人々と仕事を通じて関係性が構築できたりし、そうした関係性の中で人間の温かさを感じることができた。結果としてベトナムを大変気に入った。

満足できなかったことは、現地で異文化交流会の運営に参加することの説明が、事前になかったことである。誰もこのイベントのことを聞かされていなかったため、みんなかなり戸惑った。ただ後になって考えると、このイベント運営も何とかみんなが楽しむことができ、結果的にはこの経験も自身の成長に繋がったようにも感じる。

(6) 今後の学修

今後さらに海外プログラムに参加することは考えていない。

3年生なので就職活動に本腰を入れるとともに、卒業研究も頑張りたい。就職活動では、英語力をアピール材料として使うのではなく、就職後の業務で活かせるツールとして捉えている。就職先としては、地方創生など地域の活性化に貢献できるような企業を探している。卒業論文については、テーマのアイデアを拡散しているところで、地域の活動の経済波及効果、飛び級制度導入による社会的コスト削減などを考えている。

2. 学習院大学学生2（国際社会科学部国際社会科学科1年）

(1) 入学前の海外・異文化体験、海外プログラム参加に対する気持ち

中学生の時、居住している市が主催する英語スピーチコンテストで2位となり、3泊4日の韓国研修に行った。また、高校1年生の8月にも居住している市の姉妹都市交流事業で1週間アメリカ・テキサス州に滞在した。その時、ホームステイでお世話になったホストファミリーとは、今でもメールやSNSで交流がある。また、高校時代に自分の高校に留学してきたドイツ人の留学生と仲良くなり、今もメールなどで交流が続いている。その他、地域で行われる異文化に関するイベントに参加することもあり、外国からの移住者の話を聞いたことが印象に残っている。

こうした経験やテレビなどを通して海外に興味を持っていたため、大学進学の際には国際系学部を志望していた。中でもエスニック料理に馴染みがあったことや親日的なアジアのある国を扱ったテレビ番組の影響で、東南アジアに関心があった。ただ、受験する時は、

受験大学の入学後の具体的な留学プログラムまでは調べてはいなかったため、FPT 大学グローバルインターンシップのことを知ったのは、入学後にパンフレットを見てからだった。自分が海外プログラムに対して求める条件は、費用が安く、インターンシップができて、外国人のルームメイトと生活できるということだったので、まさに全てが満たされていた。なお、インターンシップを目的としたのは、将来の就活を考えてのことである。

(2) 参加した海外プログラム

FPT 大学グローバルインターンシップでは、現地に着いてからは、まず言語の授業を受けた。英語でエントリーシートを書く時の様子を教わった他、プレゼンテーションや面接の練習もあった。また、ベトナムの文化に慣れるためのオリエンテーションも受け、コミュニケーションの仕方なども教わった。

インターンシップでは、ホテルのフロントに配属された。日本人のお客様対応を期待されていたが、最初の頃は日本人のお客様がなくて、フロントの後方で他の人の仕事を見ていただけだった。そのため、このままではインターンシップの意味がないと考え、他の人の仕事ぶりを観察し、その上で自ら積極的に仕事のやり方を質問して仕事を覚えていった。そうしているうちにチェックイン、チェックアウト、部屋の案内などお客様対応の様々な仕事を任されるようになり、日本人のお客様のトラブルも解決するなど自分なりに職場に貢献できたとの達成感が持てた。

仕事の合間には、一泊のキャンプに参加して、そこで初めて会った留学生たちとゲームなどを通じて交流できたことは良い思い出となった。また、プログラムの終盤には、当プログラムの全員が参加する文化交流イベントがあり、自分達のグループは、日本のポップスやダンスなどのパフォーマンスを行ったほか、ブースで焼きそばや豚汁を提供した。食材の仕入れなども自分達で全て行い大変だったが、味の評判も良かったので苦労した甲斐があったと思う。

(3) 事前・事後学習について

FPT 大学グローバルインターンシップに特化した事前学習はなかったが、「海外研修Ⅰ」の授業では、海外留学についての全般的なことを学んだ。また、インターンシップの業種を決めるため、事前に Skype で FPT 大学の個別面談を受けた。ただ、現地に行ってから知ることが多かったため、事前学習でもう少しベトナムのことを詳しく学ぶ機会があれば良かったと思う。

事後学習は「海外研修Ⅱ」の授業で、ベトナム以外の海外プログラムに参加した学生と学年も含めて合同で、グループワークを通じて多様性を考えるという観点で振り返りを行った。ここでは、改めて日本とベトナムの活気の違いや経済格差について考えた。特に経済格差については、現地の日本語専攻の学生と仲良くなって、実家に遊びに行った際、自分達がインターンシップを行っているダナンとは明らかに異なる貧しい地域であることを実感し

たことは鮮明に記憶している。また、「海外研修Ⅱ」の授業は英語で行われたので、先輩学生の英語力のレベルの高さを実感したことで英語に対する学習意欲が高まった。

(4) 成長を感じる点

インターンシップ先の職場では、毎日様々なことが起こり、それを一つひとつ解決することが仕事となる。そのための課題解決力やコミュニケーション力は高まったと思う。また、異なる文化に対して、自ら積極的にかかわっていくこともできるようになった。特に食文化に対しては、日本では食べることのない地元の食材（カエル、昆虫など）でも意識的に食べるようにした。自分にとっては挑戦的な取り組みだったが、それで体調を崩すこともなく適応することができた。

(5) 満足・不満足な点

満足していることとして、インターンシップで自分のできるベストが尽くせたことがあげられる。また、初めての一人暮らしとなったが、毎朝遅刻することなく出勤して、規則正しい生活ができ、身の回りのことを自分でできたことは自信になった。自分にとって未知の食材に挑戦でき、今でも連絡を取り合う友人ができたことにも満足している。

不満足なこととして、仕事へのプレッシャーから体調を崩してしまったため、あまり街を出歩くことができなかったことが心残りだ。また、もともと英語のヒアリングが苦手だったが、ベトナム訛りの英語が時々全く聞き取れなかったことや自分の言いたいことをうまく表現できなくて、コミュニケーションが十分できなかったことが残念だった。英語力向上の必要性を痛感した。

(6) 今後の学修

「海外研修Ⅱ」の授業で、長期プログラムに参加した先輩方の英語レベルの高さに刺激を受け、また、留学経験者が増えている中、自分は短期留学しか経験がないことや中長期の留学に行く友人のことを考えると、英語力向上だけではなくキャリア形成のためにも中長期の留学をしたいと思うようになった。しかし、親からは、留学先の国の文化への関心や留学先大学での学修目標など、明確な目的を持った留学以外には反対だと言われている。そのため、今は目的が見出だせるような留学プログラムについての情報収集をしている。

3. 学習院大学学生3（国際社会科学部国際社会科学科2年）

(1) 入学前の海外・異文化体験、海外プログラム参加に対する気持ち

父親が外資系企業に勤務していたこともあり、幼少期から毎年のように海外旅行に行くとともに、中学校での修学旅行がニュージーランドであったなど、異文化との接点は多くあった。高校1年生の夏に、ロスアンゼルスでの2週間の語学研修に参加した折、フランスか

ら参加してきていた日本好きの男性から、「好きな日本語は『先輩』。フランスには年長者を敬う言葉がない」との話を聞き、「自分では気づいていない日本の魅力」に興味を持つようになった。こういったことから、大学では「外から日本を見てみたい」との思いを持つようになり、留学は必ずしようと考えていた。

(2) 参加した海外プログラム

入学当初は、ハワイ大学への語学留学を考えていたが、「海外研修Ⅰ」の講義において、インターンシップを兼ねた海外留学制度があることを知った。単なる語学研修であれば、高校時代にも参加した経験があるため、自分にとって得られるものがより多いのではとの思いと、入学前は漠然と「将来は観光にかかわる仕事がしたい」と考えていたが、国際社会学部において経済学や経営学を学んでいくうちに、自分が得意だと思っていた「異文化理解」分野より経営学の方が、実は自分に向いているのではないかと気づきがあり、海外でのインターンシップを通して、自分を見つめなおしてみたいとの考えから、2年時において【FPT 大学グローバルインターンシップ】に参加。

5週間のプログラムで、最初の1週間はオリエンテーションと英語の授業など。英語の授業は、講義ではなくディスカッション・カンバセーションが中心の実践的な内容で、大変勉強になった。その後のインターンシップでは、リゾートホテルのレストラン部門の担当となる。8月中旬は日本からの来客が中心であったが、下旬以降はヨーロッパからの来客ばかりになるなど、世界各国から来訪者があり、接客の仕方、テーブルマナーの国による違いなどとても勉強になった。また、職場の同僚から夕食に誘われることも多々あり、旅行では行かないような飲食店（オープンマーケット）での食事など、様々なコミュニケーション機会があった。早朝からの業務など、とてもハードな5週間だったが、とても充実していた。

(3) 事前・事後学習について

事前学習としては、必須の「海外研修Ⅰ」が該当するが、本講座では、渡航先の海外事情や危機管理などだけではなく、学習院大学が提供する様々なプログラムの紹介のほか、先輩の体験談などを具体的に聞くなど、様々な留学の形を知り、それをどう生かしていくのかなども含め、留学のイメージを具体的につかむことができた。

事後学習「海外研修Ⅱ」では、様々な国への様々なタイプの留学者が、学年に関係なく集まり、それぞれの体験や気づきを英語でプレゼンしあうとともに、留学で学んだことをこの先どう生かしていくのかを考えた。そのことにより、これから自分が学ぶべき課題などが明確になった。

(4) 成長を感じる点

まず一番に言えることは、自分自身に自信がついたこと。現地では、多くの人から笑顔をととても評価された。このことにより、コミュニケーションツールとしての表情の重要性を認

識するとともに、この長所といえる笑顔をこれからも活かしていきたいと考えるようになった。次に成長した点としては、責任感と自己管理能力。このプログラムへの参加者の半数以上が1年次生であり、上級学年として、責任ある行動を気にかけるようになった。また、日常は実家からの通学で、すべて親任せの生活をしてきたが、留学先での自炊をはじめ、早朝からの勤務においても一度も遅刻することなく過ごすなど、自己管理能力も身についた。

(5) 満足・不満足な点

当初、ベトナムという国への理解が乏しく、渡航に際し不安な点もあったが、充実したプログラムと、現地の方々の温かい受け入れで、ベトナムという国・人々がとても好きになった。留学プログラムとしては非常に満足しているが、現地スタッフからの連絡事項の伝達が、時間的にルーズである点などは、ちょっと不便ではあった。

(6) 今後の学修

この先のさらなる留学は考えていないが、今回の留学を通して、職業選択を意識するようになった。発展途上であり、どんどん成長しているベトナム。その過程に自分もかかわっていったらとの思いが強くなった。就職においても、国際的な業務のできることを考えており、簿記をはじめ、経営学の勉強を、経済学部において履修していきたいと考えている。また、海外とのかかわりを持つ上においては、日本のことをより深く理解することも大切だと考え、文学部での日本文学の受講も考えている。併せて、ベトナム語も少しではあるが話せるようになったので、6月には「実用ベトナム語技能検定試験」も受験する予定。

4. 学習院大学学生4（国際社会科学部国際社会学科2年）

(1) 入学前の海外・異文化体験、海外プログラム参加に対する気持ち

2歳から8歳までアメリカのアイオワ州とカリフォルニア州に住み、現地の小学校に通っていた。それ以外には台湾へ修学旅行に行ったくらい。

帰国後は地域の学校に通い、英会話スクールなどにも行かなかった。リスニングの力は維持できているが、スピーキングなどは衰えており、アメリカ時代の友人が遊びに来た時に思うように話せずショックを受けた。それで、海外留学が卒業要件になっていて、2年生からの授業はすべて英語で行われている学習院大学の国際社会学部を選んだ。

入学前から長期留学に必ず行くつもりだった。入学後に本プログラムのことを知り、長期留学のための準備として参加してみようと思った。

複数プログラムの中からこのプログラムを選んだ理由は、英語はある程度できるのでインターンシップに行きたかったから。

(2) 参加した海外プログラム

最初の1週間が FPT 大学ダナン校での英語研修。教員はブルネイ人なので、学校が説明するようなベトナム人の発音に慣れておくという効果はなかった。授業は学習院の英語の授業と同じで、レクチャーと討論とプレゼンテーションだった。ただ、一緒に行った学生に英語力のばらつきがあり、最も低い人に合わせてやりますと言われた時にはショックで、実際に自分にとってほとんど意味はなかった。寮はブルネイ人の学生と同室だった。

インターンシップはホテルでレストランのホールスタッフで、勤務時間は7時～15時。午前中はレストランでホールスタッフをして、午後は夕食の準備までをして帰った。ホテルを選んだのは、サービス業に興味があったから。学習院大学生が4人同じホテルに行き、レストラン2人、ホテルフロント2人に振り分けられた。このインターンシップは、発展途上国の人とかかわったことで自分の考えが広がったし、将来自分は何をしたいかも変わった。日本で当たり前と思っていたこと、生活の質や礼儀正しさなどの考えが違うことに驚いた。例えば「ありがとう」を多発することはベトナムでは失礼というか違和感を持たれる。レストランのスタッフは10人～20人くらいだが、ほとんど全員が英語を全く話せない。しかし英語が使えない状況でも、絵や翻訳機を使って仲良くなった。英語だけがすべてじゃないと実感し、コミュニケーション力の自信になった。今では世界中の誰とでも会いたいと思えるようになった。これらレストランの人たちとは全員とすごく仲良くなり、今でも3カ月に1度はベトナムに行って交流している。行くたびにみんなが集まってくれる。私は2年生の2月から留学するオーストラリア国立大学でベトナム語を履修する予定だが、私と交流したことでベトナム人の彼らの中にも英語を勉強し始めた人がいて、わずか数カ月でペラペラになった人もいて驚いた。相互に影響を与え合っていることは、とても良い交流になっている。仕事そのものはホテルで働くスキルを丁寧に教えてくれた。

FPT 大学での最後のまとめプログラムは無かったと思う。

(3) 事前・事後学習について

事前学習の「海外研修Ⅰ」はあまり印象に残っていない。

また事後学習の「海外研修Ⅱ」のために、現地で質的データを集めましようと言われていたが、現地では忘れていた。ただ、授業の中で日本とベトナムの違い、ベトナムの中での地域による違いなどについて、自分の経験をもとに話したが、そのようにして振り返ることができたことは大きかったし、自分の将来についての考え方も変わった。他の国の体験も聞けて面白かった。

(4) 成長を感じる点

異文化対応力が高まったと思う。食べ物や言葉が全く違う中での、5週間は不安でもあったが、全部受け入れる姿勢で向き合い楽しめた。こんなに自分には対応力があるんだと自覚した。受け入れることに抵抗していた学生は、寮の部屋に引きこもりになってしまった。

この経験を経て、長期留学は元々するつもりでも何を学びたいか明確な目標はなかったが、ベトナム人に日本を紹介したい、アジアの途上国を豊かにしたいと考えるようになった。

ベトナム人と話をしている、「日本に行きたいけど高いので経済的に行けない」と聞いてショックを受けた。経済的に不可能な現状だが、それを豊かにして、行きたい国に行けるようにできる仕事をしたい。例えば官公庁に入って、アジアの途上国を豊かにすることにかかわる仕事がしたいと思うようになった。以前は将来サービス業に就きたいと思っていたが、変化した。

(5) 満足・不満足な点

満足しているのは、ベトナムの人々と一緒に働き、交流し、価値観の違いなどを理解できたこと。不満足なのは、現地の英語の授業が低いレベルに合わせられ得るものがなかったこと。

(6) 今後の学修

2年生の2月からオーストラリア国立大学へ1年間の留学に行く。(4)の項目で述べた方向で学び、将来を考えている。